

河川水辺の国勢調査結果の活用事例集について（案）

第1回委員会における検討等を経て、河川管理者、研究者、民間調査会社等を対象とした「(河川水辺の国勢調査)ユーザー・アンケート」を平成23年2月に実施している。この結果、河川水辺の国勢調査結果の活用事例として、事業の計画段階、工事段階、維持管理段階それぞれにおいて下記の回答があった。

計画段階

- ・正常流量検討時における魚類の維持流量検討に際して、水辺の国勢調査の結果を踏まえて、対象魚種等の選定に活用した。
 - ・河川整備計画における河道計画検討についても、水辺の国勢調査の結果を踏まえて魚類の生息場所・産卵場所等を考慮した計画とした。
 - ・既設魚道の改築の検討時において、水辺の国勢調査の結果を踏まえて、対象魚種等の選定に活用した。
 - ・激特事業による影響を評価する際に、対象河川の特徴的な種を指標種として選定し、確認種数/指標種数で表すことで工事による影響や回復状況の目安を表す指標の一つとしている。
 - ・植物相調査の結果から、下流部の中洲において、ナガミノオニシバ・ハマサジ・ホソバナ・ハマアカザ・シオクグ・ハママツナを確認したため、自然再生事業の検討において、上流右岸の事業による中洲への影響を極力小さくするため、河床変動シミュレーションを実施し、防護工線形に影響の出にくい線形とした。
 - ・河川整備基本方針及び河川整備計画の検討を行う際、河川水辺の国勢調査の結果を1枚の図にまとめた河川環境図を基に、配慮が必要な貴重種・確認位置等の抽出作業に活用した。
- など

工事段階

- ・工事の事前調査をする際に調査結果を活用した。
- ・貴重種等の営巣木としての有無を確認し、伐採箇所の縮小を行った。
- ・工事の配慮事項について、必要に応じて学識経験者など専門家より意見を頂き判断資料として活用した。
- ・支障木の伐採工事で外来種を優先的に実施するため、分布状況を確認し範囲を設定した。
- ・工事等における環境に配慮した取り組みにおいて、工事前の環境の現状を把握するために活用している。

など

維持管理段階

- ・河川占用・許可工作物の許認可の判断の際や、除草・樹木伐採の際に、重要な生息場の有無を確認するための資料として活用した。
- ・水辺の国勢調査結果により、河川区域内の外来種等の進入状況や範囲を確認し、除草時の特定外来種に対する処理などの注意喚起として活用した。
- ・魚類調査では多様性指数と河川環境評価(HIM)との比較を行った。

など

以上のように、各段階における利用は見られるため、更に具体的なイメージが分かる図や写真などに関する資料を収集する必要がある。また、64%の研究者が活用ありと回答しているため、更に河川水辺の国勢調査データを引用している具体的な論文名を把握する必要がある。そこで、今後は河川水辺の国勢調査データを利用した調査や研究論文、著書などについて具体的なイメージが分かるような資料を収集し、河川水辺の国勢調査結果の活用事例集を作成する。

この事例集を河川管理者、研究者等と共有することにより、河川水辺の国勢調査で得られたデータがより一層利用される可能性は広がると思われる。

【事例集作成の流れ】

